

## 創立前夜の陳列館

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学考古学博物館 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 初重 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/10067">http://hdl.handle.net/10291/10067</a>

# 創立前夜の陳列館

大塚初重

## 新制文学部の誕生

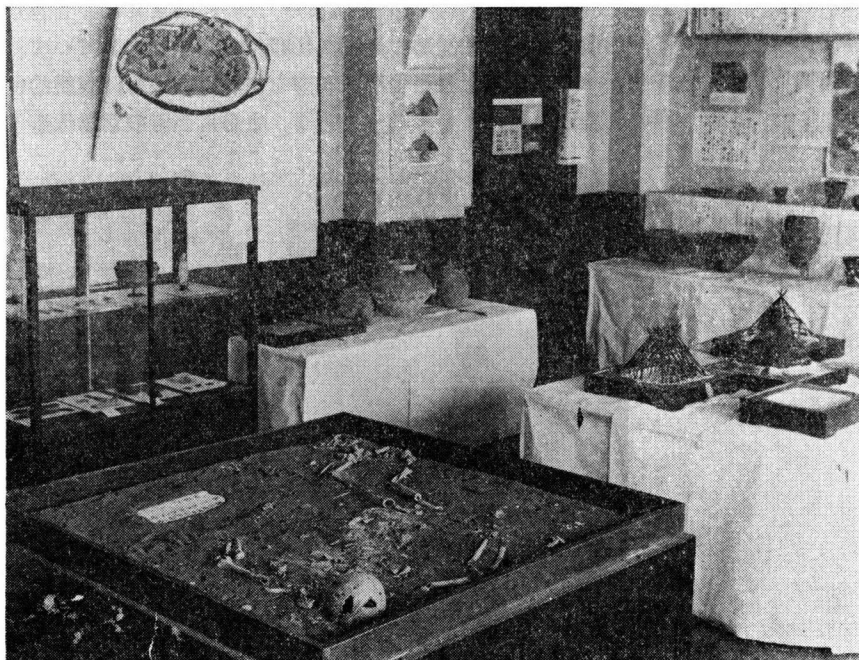
明治大学考古学博物館の開設は1952年（昭和27）のことであり、当時は考古学陳列館の名称であった。明治大学に新制の文学部が誕生したのは1949（昭和24）年4月であったが、日本史・東洋史・西洋史・地理学の四専攻をもって史学地理学科がスタートした。考古学専攻はまだ開設されておらず、後藤守一先生は東洋史専攻の教授、杉原荘介先生は日本史専攻の助教授として着任されていたのである。したがってこの段階では考古学陳列館は勿論存在しておらず、1950（昭和25）年1月25日の文学部教授会において考古学専攻の設置が承認され、同年4月から後藤教授・杉原助教授の2名が専攻講座の教員として任命された。当時、後藤・杉原両先生の間で、博物館施設創設について、どのような相談がなされ、また準備がされていたのか不明である。しかし、後日、考古学陳列館として開設される前後の準備行動などの軌跡を辿ると、開設のための中心的な役割を果たしたのは、杉原荘介助教授であったと推測される。

## 考古学専攻設置

## 研究室と陳列館 準備室の設置

1949（昭和24）年4月に新制文学部3年生に編入した筆者は日本史専攻に属し、翌年から考古学専攻に転じ、1951（昭和26）年3月に考古学専攻第一回卒業生となった。この頃には駿河台校舎記念館裏の古ぼけた建物の中に考古学研究室があり、後藤・杉原両先生が向い合う配置となり、小さいながらも図書室も用意されていた。隣接の教室をつぶして30坪前後の資料室兼展示室が出来たのも1950年頃のことであり、この年の春に市川市平田の杉原邸から先生の収蔵品の多くを大学のトラックで明治大学へ運搬した。中には須和田遺跡・鬼高遺跡をはじめ、前

Fig. 20 文化祭  
での展示



## 第1回の発掘

野町遺跡の出土資料、福岡県立屋敷遺跡、愛知県西志賀遺跡などの発掘資料も含まれていた。SUGIHARAと名前を入れた木製の資料箱を数十個も運び込んだために、研究室に急造された木製の棚はほぼ満杯となり、朝から夜10時頃まで資料整理が続けられていた。1934(昭和9)年頃に当時、専門部史学科の学生たちが、講師で出講していた後藤守一先生の指導で発掘実習を実施、千葉県江原台遺跡から亀甲形土製品や土偶を発掘したが、僅かな資料ではあったが大事に保管されていた。戦前からの発掘品にプラスして、杉原先生の収蔵品を搬入したということは、博物館開設の目標が、すでに設定されていたのかも知れない。あるいは東京と京都の二帝大の考古学研究室のような、附属の立派な展示室を開設する意欲に燃えていたのかも知れない。この辺の事情については、中心的役割を果たした杉原先生がすでに故人となられ関連の史料も今は手許にない。専門部時代の1947(昭和22)年から全国各地で調査を行っており、膨大な資料が集積しつつあって、施設の拡張もまた焦眉の急であった。明治大学の卒業生でもあった杉原先生は、大学当局に対して強力な働きかけを行ない、ついに1954(昭和27)年に駿河台校舎2号館4階に考古学陳列館を開設することになったのである。

## 開館(2号館時代)

明治大学考古学博物館(陳列館)が開設される以前のいわば胎動期といえる時期は、1948(昭和23)年から1952(昭和27)年の5年間である。戦前の1934(昭和9)年頃から兼任講師として明治大学専門部地理歴史科に出講されていた後藤先生は1948年から明治大学の専任教授となった。明治大学を1943(昭和18)年に卒業し、間もなく陸軍に召集されて中国大陸にいた杉原先生は、1946(昭和21)年に復員し文部省へ入り、「国のあゆみ」編さんにたずさわり、1947年から明治大学へ兼任講師として出校されていた。後藤先生と同様に1948年から明治大学の専任助教授となっている。この頃は新制大学への変革が始まっていた時期でもあり、考古学専攻講座と考古学陳列館開設のために心をくわいておられたものと思われる。丁度静岡市登呂遺跡の発掘が1947年から開始されていて、明治大学の教員・学生が一丸となって登呂の解明に力を注いだことも、客観的には考古学専攻の開設のためになったことであつたらう。さらに当時の常勤理事・故鈴木堅次郎氏の

## 静岡県登呂遺跡の発掘

Fig. 21 2号館4F  
時代の陳列館



**群馬県岩宿遺跡  
の発掘**

考古学への理解の深さが、考古学博物館開設にとって大きな力となったことも忘れることはできない。群馬県岩宿遺跡の発掘、静岡県登呂遺跡の発掘をはじめ、戦後の日本考古学界の中で明治大学の後藤・杉原両先生の活躍はめざましく、大学当局も特別な配慮を考えなければならないという状況もあったのであろう。

**京都大学文学部  
陳列館視察**

1950（昭和25）年秋、杉原先生は当時文学部四年生であった筆者を伴い京都大学人文科学研究所へ出張した。故水野清一教授や長広敏雄教授にお目にかかり、資料ファイルの寸法とか色調など調査させていただいた。その上、サンプルとしてファイルや各種のカードを頂戴して帰校した。故梅原末治先生・小林行雄先生を文学部考古学研究室に訪問し、とくに展示室について詳細に見学させていただいた。おそらく杉原先生の頭の中にはやがて明治大学に新設されるであろう考古学博物館の設計図がひらめいていたのではなかろうか。1951（昭和26）年になると陳列ケースの発注で、家具屋を研究室へ呼んだりしていた。まだ戦後という時期で、ケースのガラスなども薄くてひどいものだったが、それでもニスの香りのする立見ケースが運びこまれた時などの杉原先生の満足そうな顔は忘れることができない。考古学専攻の第一期生は総勢8名であったが、資料整理に来る日もくる日も追いまくられ、校門を出るのは毎夜10時前後であった。1951年4月から文学部助手となった大塚は、翌年春の開館準備のため多忙をきわめた。考古学専攻の最上級となった芹沢長介・岡本勇両氏なども博物館開設の仕事をするのが多かった。

**備品の発注**

**手づくりの模型  
製作**

1952（昭和27）年春、2号館4階の考古学陳列館が開館した。駿河台の大通りに半円形に突出した部分が展示室となった。登呂遺跡の400分ノ1の石膏模型と神奈川県平坂貝塚出土の縄文早期の人骨が復原展示された。登呂の模型は第一期生の片桐健栄氏が製作し、平坂人骨を置く土台の砂は、市川市の杉原先生の庭から学生たちが運んだ。資料ファイルに遺跡名を記入するのは大塚の役目であったが、そのファイルは形式も色調も京大人文研とそっくりのものであった。明治大学考古学陳列館という名称も、京都大学文学部陳列館の名称に学んだものであった。日頃の杉原先生の言動から察すると、先生がいかに京都大学の考古学に傾倒していたかということのあらわれだと思われる。

**開館祝賀会**

開館当日は整理室の棚には、縄文土器がぎっしりと並べられ、白いテーブルクロスをかけた整理台には、豪華なオードブルが並んだ。林立したビールの数も招待した理事と関係者の数倍の量であった。杉原荘介先生の想いがかなった気持の表現であったともみとれよう。

展示室と整理室の間に資料室があり、その中に小さな講義室と研究室がつくられ、小型ながらも考古学専攻の授業が、大学附属博物館を利用して実施できるという理想に近い形態で実現したのである。考古学陳列館の本格的な活動は、1952年以後に開始されることになる。